01 アメリカと中国

松尾文夫 著

岩波書店
3000円＋税／329＋27ページ

profile

まつお・ふみお
ジャーナリスト。1933年生まれ。学習院大学卒業。共同通信社入社後、ニューヨーク特派員、ワシントン特派員、バンコク支局長、ワシントン支局長、共同通信マーケッツ社長などを歴任。2002年5月からフリージャーナリストとして現役復帰している。

事実関係と現場感覚が見事に結実した労作

評者 慶応義塾大学環境情報学部教授 **渡辺 靖**

米国研究や米国報道に携わる者で著者を知らない人はモグリだろう。知米派ジャーナリストの筆頭格として我が国の米国理解を牽引してきた。日米両国の首脳による広島や真珠湾への献花訪問を強く提唱してきたのも同氏である。

同氏の名を世間に広く知らしめたのは1971年4月の『中央公論』に寄稿した「ニクソンのアメリカと中国」と題する論考。3カ月後のキッシンジャー秘密訪中によるニクソン大統領の中国訪問の発表を予言するかのような鋭い分析だった。

幼少期を中国で過ごし、東京空襲時には米国の爆撃機を間近に見上げるという壮絶な原体験を有する著者にとって、米国と中国というのは実存的存在であり、双方のえも言われぬ複雑な関係を解き明かすことはライフワークなのだろう。

いや、そう考えなければ、御年83歳での300ページを超える本書の執筆は説明できない。しかも、ありがちな既出の論考集でもなければ、随想録でもない。本書の書き下ろしのために約14年もの歳月をかけて、米国と中国を幾度も往復し、文献を漁り、現場を訪れ、インタビューを重ねた労作だ。事実関係と現場感覚の双方が見事に結実している。

さらに本書を際立たせているのは、歴史的なスパンの大きさである。ペリー艦隊来訪の69年前に広東を訪れていたニューヨークの商船「エンプレス・オブ・チャイナ（中国皇后号）」の軌跡から始まり、アヘン戦争における米中のしたたかな共生・共存、米国を代表する思想家ジョン・デューイに傾倒した毛沢東、蔣介石支援の失敗などを通して、今日の米中関係の伏流を照射している。

しかも歴史的・思想的な補助線が丁寧に引かれているおかげで、歴史物語を堪能するかのごとく読み進めることができる。10章それぞれがテレビのドキュメンタリー番組になっても不思議ではない完成度の高さ。著者の博覧強記に圧倒される。

日本は自らの対中観を米国側も共有していると思い込み、しばしば米国の対中姿勢に失望する。本書では、日米和親条約が締結された1854年にすでに中国人留学生容閎（清末の改革主義者）が米東部の名門イェール大学を卒業していたことが紹介されているが、米中関係は私たちが考えている以上に古く、深く、そして広い。

トランプ政権の対中政策には不透明感が漂うが、大統領が何でも出来るわけではない。太平洋を挟んだ二つの大国のただならぬ歴史はしっかりと理解しておく必要があろう。

戦中世代でもある著者からの警鐘を重く受け止めたい。

目次

アメリカと中国

プロローグ——フィラデルフィアの建国エネルギーから始まる	
第一章	建国の父——「中国」に「活路」を見つけたモリス
第二章	儒教思想「西進」のインパクト
第三章	「実利のビジネス」で始まった関係
第四章	アヘン戦争で始まった本音と建前の使い分け
第五章	親中イメージの中での「列強化」
第六章	「特別な関係」と差別の時代
第七章	毛沢東とアメリカとの「赤い糸」(1)——保定から長沙へ
第八章	毛沢東とアメリカとの「赤い糸」(2)——デューイが残した深い影響
第九章	蔣介石とアメリカとの距離
第一〇章	「門戸開放」政策の裏切り——蔣介石の落日
エピローグ——「競争者」としての共生	